

<論文>

ひきこもり及びひきこもり親和性の性・年齢階級別分布 －若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）の二次分析－

志 渡 晃 一¹、米 田 政 葉²

抄 録：内閣府が2010年に行った、15歳から39歳を対象とした「ひきこもりに関する実態調査」のデータの二次分析を行い、ひきこもり及び親和群の割合について性別及び年齢階級別に検討することを目的とした。

- 1) ひきこもり群の割合は、全体で1.8%（3,282名中59名）であった。
- 2) ひきこもり群の割合を性別にみると、女性の1.2%（1,718名中20名）に比べて男性が2.5%（1,564名中39名）と有意に高かった。
- 3) ひきこもり群の割合を5歳年齢階級別にみると、男性では1.0%～3.4%、女性では0.5%～2.2%の範囲で変動していたが、統計的に有意な差は認められなかった。
- 4) 親和群の割合は、全体で4.0%（3,282名中131名）であった。
- 5) 親和群の割合を性別にみると、男性の3.1%（1,564名中48名）に比べて女性が4.8%（1,718名中83名）と有意に高かった。
- 6) 親和群の割合を5歳年齢階級別にみると、男性では1.8%～4.1%の範囲で変動していたが、統計的な有意差は認められなかった。
- 7) 親和群の割合を5歳年齢階級別にみると、女性では3.0%～9.3%の範囲で変動していた。「15歳～19歳」階級の該当率9.3%が最も高く、「25歳～29歳」階級の3.0%及び「35歳～39歳」階級の3.2%との間に有意差が認められた。

以上のことから、ひきこもり（及びひきこもり親和群）とその関連要因について検討する際には、性・年代別に分析していくことが必要であると考えられた。

キーワード：ひきこもり ひきこもり親和性 二次分析

I. 緒言

ひきこもりとは「様々な要因の結果として社会的参加（義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など）を回避し、原則的には6ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態（他者と交わらない形での外出をしてもよい）を指す現象概念」¹⁾と定義されている。内閣府の調査²⁾によるとひきこもりは国内に約69.6万名（1.8%）いるとされている。親ひきこもり親和群（以下、親和群）は、東京都の調査³⁾

で初めて提唱された概念である。「ひきこもり群と似た心理的側面を有しながらも、ひきこもり状態にならずにとどまっている。」存在³⁾（ひきこもりの予備軍的存在）とされ、国内に約155万（3.99%）名程度存在する²⁾と言われている。

全国引きこもりKHJ親の会が行った調査⁴⁾では、ひきこもりの初発年齢には二峰性が見られている。京都府精神保健福祉総合センター⁵⁾によると、ひきこもるきっかけの主なものとして「いじめ、不登校などの学校に関すること」「進路選択の失敗や職場不適応に関すること」の2要因を挙げている。また、ひきこもりの頻度については、女性に比べて男性に多くみられることが斎藤⁶⁾をはじめとしたいくつかの先行研究^{2) 3) 4)}で指摘され

* 1：医療福祉政策学講座

* 2：大学院看護福祉学研究科修士課程

ている。

これらのことから、ひきこもり（及び親和性）とその関連要因等を明らかにするためには、性・年齢別に検討すべきであることは明らかである。しかし、内閣府が行った分析²⁾では、ひきこもり（及び親和群）とその関連要因について性別・年齢階級別には検討されていない現状にある。そこで本研究では、内閣府のデータを二次解析し、性別・年齢階級別にひきこもり群及び親和群の割合を記述することによって今後の研究の基礎資料を得ることを目的とした。

Ⅱ. 方法

1. 対象

二次分析に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）（内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室）

の個票データの提供を受けた。本調査は2010年2月に国内に住む15歳以上39歳以下の若者5000名を対象とし行われた。回収数は3282名（回収率65.7%）であった。また、サンプリング方法は層化二段無作為抽出法であり全国200市町村の200地点を対象としている。自記式質問紙による調査員による訪問留置・訪問回収法にて配布・回収を行った。性・年代ごとの回収率を表1に示した。

2. 質問項目

1) 基本属性8項目、2) 学校に関すること3項目、3) 就労に関すること4項目、4) 普段の活動に関すること2項目、5) ひきこもりの状態に関すること3項目、6) 相談機関に関すること3項目、7) 自分についてあてはまること3項目、8) 家庭の状況について1項目、9) 悩み事の相談に関すること2項目

3. 集計方法

SSJデータアーカイブから提供を受けたデータセット

資料1 ひきこもり群の操作的定義

「普段どのくらい外出しますか」（一つだけ選択）

1. 仕事や学校で平日は毎日外出する
2. 仕事や学校で週3～4日外出する
3. 遊び等で頻繁に外出する
4. 人づきあいのためときどき外出する

5. 趣味の用事の時だけ外出する

6. 近所のコンビニなどには出かける

7. 自室からは出るが、自宅からは出ない

8. 自宅からほとんど出ない

上記8項目の中で5～8に該当するもののうち

現在の状態となってどのくらい経ちますか。」について、6ヶ月以上と回答した者かつ

現在の状態になったきっかけは何ですかで

①「病気（病名： ）」を選択し、病名に統合失調症又は身体的な病気を記入した者、

②「妊娠した」を選択した者、

③「その他（ ）」を選択し、（ ）に自宅で仕事をしている旨や出産・育児をしている旨を記入した者又は

ふだんど自宅にいたときによくしていることすべてに○をつけてください。」で、「家事・育児をする」と回答したものを除いた群をひきこもり群とした。

『若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）』より引用

資料2 親和群の操作的定義

家や自室に閉じこもって外に出てこない人の気持ちがわかる。

（ 1.はい 2.どちらかといえばはい 3.どちらかといえばいいえ 4. いいえ ）

自分も、家や自室に閉じこもりたいと思うときがある。

（ 1.はい 2.どちらかといえばはい 3.どちらかといえばいいえ 4. いいえ ）

嫌な出来事があると、外に出たくなくなる。

（ 1.はい 2.どちらかといえばはい 3.どちらかといえばいいえ 4. いいえ ）

理由があるなら家や自室に閉じこもるのも仕方がないと思う。

（ 1.はい 2.どちらかといえばはい 3.どちらかといえばいいえ 4. いいえ ）

下線部『平成19年度若年者自立支援調査研究報告書』より引用

ひきこもり親和性を算出する際に、「1.はい」には4点、「2.どちらかといえばはい」には3点、「3.どちらかといえばいいえ」には2点、「4.いいえ」には1点を配点し合計点を算出。合計点数は4点から16点であり、15点以上に該当するものをひきこもり親和群とした。

表 1. 性・年齢階級別回収率

	男性			女性		
	標本数	回収数	回収率	標本数	回収数	回収率
	2,478	1,566	63.2	2,522	1,721	68.2
15～19歳	402	301	74.9	397	303	76.3
20～24歳	425	244	57.4	451	267	59.2
25～29歳	499	301	60.3	482	300	62.2
30～34歳	537	323	60.1	546	380	69.6
35～39歳	615	397	64.6	646	471	72.9

若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）²⁾より抜粋

を使用した（IBM SPSS Statisticsを使用）。分析項目は、目的変数をひきこもり尺度及び親和性、説明変数を性別及び年代とした。

ひきこもり群の操作的定義を資料 1 に示した。普段の外出頻度に関する質問項目に「趣味の用事の時だけ外出する」「近所のコンビニなどには出かける」「自宅からは出るが、自宅からは出ない」「自宅からはほとんど出ない」のいずれかと回答したもののうち、その状態が 6 ヶ月以上持続しているものから、その要因が病気や妊娠・出産・育児であるものを除いた群を、ひきこもり群と定義した。

親和性の操作的定義を資料 2 に示した。15点以上の群から「ひきこもり群」を除外した群を「親和群」、その他の群を「一般群」とした。

4. 分析方法

分析方法は、単変量解析として、性別ごとに、5 歳ごとに年齢階級別のひきこもり群、親和群、一般群の該当割合を用いて分割表を作成し、フィッシャーの直接確率検定、Bonferroni法で有意確率を補正したz検定を用いて関連の有意性を検討した。

表 2. ひきこもり群及び親和群の年代別割合（全体）

	15～19歳	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	合計	n(%)
	603 (100)	511 (100)	598 (100)	702 (100)	868 (100)	3282 (100)	
ひきこもり群	9 (1.5)	12 (2.3)	11 (1.8)	13 (1.9)	14 (1.6)	59 (1.8)	
親和群	40 (6.6)cd	24 (4.7)	16 (2.7)	29 (4.1)	22 (2.5)	131 (4.0)	
一般群	554 (91.9)	475 (93.0)	571 (95.5)	660 (94.0)	832 (95.9)	3092 (94.2)	

c : $p < 0.05$ by z検定 (bonferroniの調整にてp値を調整)、vs 25～29歳

d : $p < 0.05$ by z検定 (bonferroniの調整にてp値を調整)、vs 35～39歳

表 3. ひきこもり群及び親和群の年代別割合（男性）

	15～19歳	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	合計	n(%)
	301 (100)	244 (100)	299 (100)	323 (100)	397 (100)	1564 (100)	p
ひきこもり群	3 (1.0)	6 (2.5)	8 (2.7)	11 (3.4)	11 (2.8)	39 (2.5)	a
親和群	12 (4.0)	10 (4.1)	7 (2.3)	12 (3.7)	7 (1.8)	48 (3.1)	
一般群	286 (95.0)	228 (93.4)	284 (95.0)	300 (92.9)	379 (95.5)	1477 (94.4)	

a : $p < 0.05$ by Fisherの直接確率検定、vs ひきこもり群（女性）

表 4. ひきこもり群及び親和群の年代別割合（女性）

	15～19歳	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	合計	n(%)
	302 (100)	267 (100)	299 (100)	379 (100)	471 (100)	1718 (100)	p
ひきこもり群	6 (2.0)	6 (2.2)	3 (1.0)	2 (0.5)	3 (0.6)	20 (1.2)	
親和群	28 (9.3)cd	14 (5.2)	9 (3.0)	17 (4.5)	15 (3.2)	83 (4.8)	b
一般群	268 (88.7)	247 (92.5)	287 (96.0)	360 (95.0)	453 (96.2)	1615 (94.0)	

b : $p < 0.05$ by Fisherの直接確率検定、vs 親和群（男性）

c : $p < 0.05$ by z検定 (bonferroniの調整にてp値を調整)、vs 25～29歳

d : $p < 0.05$ by z検定 (bonferroniの調整にてp値を調整)、vs 35～39歳

Ⅲ. 結果

1. ひきこもり及び親和群の割合（全体）

表2にひきこもり及び親和群の全体の年齢階級別割合を示した。全体でひきこもり群1.8%、親和群4.0%であった。

性別では、男性のひきこもり群は2.5%、女性では1.2%であり男性で有意に該当率が高かった。一方、親和群の該当率は男性で3.1%、女性で4.8%と女性で有意に該当率が高かった。

年齢階級別にみるとひきこもり群は、1.5～2.3%に分布しており親和群は、2.5～6.6%に分布していた。ひきこもり群は年齢階級間で有意な差はみられなかった。親和群は25～29歳、35～39歳と比較し15～19歳で該当率が有意に高かった。

2. ひきこもり及び親和群の割合（男性）

表3に男性のひきこもり及び親和群の年齢階級別割合を示した。男性のひきこもり群2.5%、親和群3.1%であった。年齢階級別にみると、ひきこもり群は1.0%～3.4%に分布しており、親和群は、1.8%～4.1%に分布していた。両群とも有意な差の見られた項目は無かった。

3. ひきこもり及び親和群の割合（女性）

表4に女性のひきこもり及び親和群の年齢階級別割合を示した。女性全体ではひきこもり群1.2%、親和群4.8%であった。年齢階級別にみると、ひきこもり群は0.5～2.2%に分布しており、親和群は、3.0～9.3%に分布していた。ひきこもり群は年齢階級別で有意な差はみられなかった。親和群は25～29歳、35～39歳と比較し15～19歳で該当率が有意に高かった。

Ⅳ. 考察

本調査でのひきこもり群の該当率は、男性2.5%、女性1.2%である。これを日本全体の同年齢階級の人口⁷⁾である男性約1,820万人と女性約1,760万人に当てはめるとひきこもり者の人数は男性で約45万5,000人、女性で約21万1,200人と推定することができる。これをもとに性比を計算するとは男性6.8：女性3.2となる。斉藤⁶⁾の研究ではひきこもりの性比は男性8：女性2程度であるとしている。また、東京都の調査³⁾では男性6.9：女性3.1である。厳密な比較は困難であるが、これを支持する結果だと考えることができる。しかし、男女比を算出する場合、調査対象の母数に結果が影響されることが考えられる。そのため、今後は性別の発生率に注目して検討する必要がある。

親和群は全体で4.0%であった。性別では男性3.1%、女性4.8%と女性の方が多かった。また、女性では、25～29歳、35～39歳と比較し15～19歳で多くみられている。著者ら⁸⁾が医療福祉系高等教育機関に所属する学生を対象として行った親和性に関する研究では、親和群の割合は全体15.5%、男性11.1%、女性16.0%であり有意差はなかった。これと比較するため15～24歳の親和群の割合を算出したところ、全体5.7%、男性4.0%、女性7.4%であり、女性で該当率が高い傾向は一致していたが、性別ともに著者らの研究の親和群の該当率が高かった。このことから、医療福祉系高等教育機関における学生の特徴として、一般と比較し親和性が高いことが想定される。

本研究の有効性は、男女間で回収率の差がなく、性別におけるバイアスが少ないこと、内閣府の調査から性・年齢別にひきこもり群及び親和群の割合を記述したことである。

本研究から、性年齢別にひきこもり及び親和性の関連要因の検討を行う必要性が考えられる。しかし内閣府の調査では、性年齢別に関連要因の検討は行われていない。今後の課題として、性・年齢階級別の別にひきこもり群及び親和群の割合を記述すると共に関連要因について検討していく必要がある。

Ⅴ. 謝辞

本研究は、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブからデータの提供を受けて行った研究である。

参考文献

- 1) 厚生労働省。ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン（2012年9月1日）
http://www.ncgmkohndai.go.jp/pdf/jidouseishin/22ncgm_hikikomori.pdf
- 2) 内閣府政策統括官。若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する調査）。（2012年9月1日）。
http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/pdf_index.html
- 3) 東京都青少年・治安対策本部。平成19年度若者自立支援調査。（2012年9月1日）。
http://www.seisyounen_chian.metro.tokyo.jp/seisyounen/pdf/14_jyakunen/jittaihoukokusyo.pdf
- 4) 全国HKHひきこもり親の会。H26年度ひきこもりピアサポーターに関するアンケート調査。（2015年4月1日）。
<http://www.khj-h.com/pdf/14houkokusho.pdf>
- 5) 京都府精神保健福祉総合センター。こころのための

サービスガイド。(2015年9月1日)。

http://www.pref.kyoto.jp/health/health/health07_f.html#h07

6) 齊藤環 (1998)。社会的ひきこもり。25-27、株式会社PHP 研究所、日本。

7) 総務省統計局。日本の統計2015。(2015年10月1日)。

<http://www.stat.go.jp/data/nihon/zuhyou/n150200500.xls>

8) 米田政葉、志渡晃一 (2014)。ひきこもり親和性に関する検討。北海道医療大学看護福祉学部学会誌。11 (1) : 43-47

The HIKIKOMORI and HIKIKOMORI affinity of sex and age group distribution —Secondary analysis of research on young people's consciousness (Survey on withdrawal)—

Koichi SHIDO¹ Masaha YONETA²

Abstract : The purpose performs a secondary analysis of the data of the Cabinet Office went to the 2010 " Survey on Hikikomori", Hikikomori and for the percentage of affinity groups that you consider for each gender and age group.

- 1) Hikikomori group was 1.8% (59 out of 3,282) of the total.
- 2) Hikikomori group for men was 2.5%(39 out of 1,564), women were 1.2%(20 out of 1,718).
Hikikomori group of men was significantly higher than women.
- 3) The proportion of 5 -year-old age group of the Hikikomori group, men of 1.0% to 3.4%, Women 0.5% to 2.2%. There were no significant differences between the two groups.
- 4) Hikikomori affinity group was 4.0% of the total.
- 5) Hikikomori affinity group for men was 3.1%(48 out of 1,564), women were 4.8%(83 out of 1,718).
Hikikomori affinity group rate of women was significantly higher than men.
- 6) Looking at the ratio of Hikikomori affinity groups by 5 -year-old age group, although the man was varied in the range of 1.8% - 4.1%, a statistically significant difference was not observed.
- 7) Looking at the ratio of Hikikomori affinity groups by 5 -year-old age group, although the woman was varied in the range of 3.0% - 9.3%. The highest ratio of "15-year-old to 19 years (9.3%)", it was t significantly higher ratio compared to the "25-year-old to 29 years old (3.0%)" and "35-year-old to 39 years (3.2 percent)."

In conclusion, when considered with the Hikikomori and Hikikomori affinity group for the relevant factors, it was considered necessary to continue to analyze by gender and age.

Keyword : Hikikomori , Hikikomori affinity , Secondary analysis

* ¹ Department of social policy

* ² Graduate School of Nursing and Social Service